

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (経済学)	氏名	JINGHAN KE (可靖涵)
論文題目	Alternative Agri-Food Networks and Rural Development: The Case of China in the Context of <i>Sannong</i>		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、農業の工業化の中で形成されてきた主流の農産物供給システムに対するオルタナティブのあり方と、それを通じて新たに形成されつつある生産者と消費者の関係性の変化が、どのように農村発展につながるかという普遍的な問題意識に基づき、中国でブームとなっているCSA (地域支援型農業) をはじめとするオルタナティブ・アグリフード・ネットワーク (AAFNs) を例に、それが「三農問題」を抱える同国の農村発展にどのような影響を与えているかを明らかにするための一考察である。より具体的には、中国のAAFNsは欧米諸国のAAFNsから影響を受けて取り入れられただけなのか (何らかの独自性を有しているのか) 否か、それは「三農問題」に対処しながら農村発展を促進する可能性を有しているのか否か、という二つの研究課題を設定し、中国の3省におけるフィールド調査及び16省にわたるオンライン調査を元に、理論的・実証的な考察を加えたものである。</p> <p>まず第1章では、先進国におけるオルタナティブな食農システムに関する農業食料社会学分野の先行研究、ならびに中国国内のAAFNsに関する先行研究を整理しながら、後者の研究の多くが前者の研究で明らかにされたAAFNsの定義 (形態や機能、役割) についての概念的な紹介にとどまり、中国農村社会の実情に即した実証的な研究視座が欠けていることを明らかにしている。そして、「三農問題」に関する先行研究と農村発展パラダイムに関する先行研究のレビューを踏まえて、本論文の立ち位置と学術的貢献可能性が示されている。</p> <p>第2章では、本論文で用いる分析枠組みと調査・分析方法が紹介され、それらを用いる妥当性が論じられている。具体的には、Short Food Supply ChainsやNested Marketなど既存のAAFNs研究で用いられてきた分析アプローチを整理・紹介し、それらを中国のAAFNsにそのまま適用するのは困難であることが指摘されている。そして、中国農村の実情をより適切に反映できる分析枠組みとして、AAFNsの機能・役割と親和性の高い、農民問題・農業問題・農村問題という三つの側面を包括する「三農問題」の枠組みに着目し、これをAAFNsの分析枠組みとして再構築する試みがなされている。また、現地データの収集・分析方法と調査上の課題が説明されている。</p> <p>第3章では、中国の経済発展と農業改革及びそれに伴う食料問題に関する先行研究のレビューと河南省で実施したフィールド調査における観察に基づきながら、AAFNsの社会的・経済的・政治的な背景がマクロ的な視点から分析されている。具体的には、①1949年以降の政治改革・農業変容、②主流農産物供給システムの構造問題と小農のジレンマ、③消費構造の変化と中産階級消費者の増加、④生態農業の推進、⑤食品安全事件と消費者の信頼問題、という五つの側面から、AAFNsが中国で生成・発展してきた背景が論じられている。</p> <p>第4章では、AAFNsが「農民問題」に及ぼす影響が明らかにされている。フィールド調査及びオンライン調査を実施した19省・70事例のCSA農場のデータに基づき、農場主の経歴やAAFNsに参加した動機・契機、社会的ネットワーク、小農との関係などを分析し、中国のAAFNsが、農村で暮らし営農してきた小農自身ではなく、市民社会組織や「新農民」「新農村エリート」と呼ばれる社会企業家的な都市住民に主導され</p>			

ていること、同時に、小農がAAFNsの実践を通して市民社会組織や都市消費者と接点を構築する中で、自律性、文化的自信、環境意識、社会的責任感、協働意識等の面でエンパワーメント（自己陶冶・啓発）の機会を得ていることが明らかにされている。現段階では、AAFNsが小農に与える経済的便益は限られているものの、小農のエンパワーメントに果たしうるAAFNsの積極的な役割が注目されている。

第5章では、AAFNsが「農業問題」に及ぼす影響が明らかにされている。具体的には、欧米諸国の食農研究における「品質」をめぐる議論と比べ、中国では「品質」をめぐる学術的・政策的議論はまだ物質的な安全性という狭い意味にとどまっていることを指摘した上で、広義の「品質」をめぐる合意形成と取引関係を概念化したコンバージョン理論を適用しながら、フィールド調査の結果に基づき、独自に「諸主体間関係への視点」と「家族的価値等の文化的な視点」を加えることによって、AAFNsに適用可能な分析枠組みが提示されている。そして、生産段階では多様な環境保全的農法と農地管理によって、流通段階では生産者と消費者の信頼関係を構築するための多様な実践によって、広義の「品質」を確保するための取組が行われていること、とくに主体間関係的、環境的、文化的、市民的な合意に基づく品質構築がより強く志向されていることが明らかにされている。

第6章では、AAFNsが「農村問題」に及ぼす影響が明らかにされている。フィールド調査とオンライン調査の結果に基づき、van der Ploegらが提示した小農的農業の多元的活動を通じた農場レベルの農村発展モデルでは、市民社会組織と「新農民」や「新農村エリート」に主導された諸実践が十分に考慮されていない点を指摘した上、非小農的主体の先駆的活動に牽引されたAAFNsを通じた中国農村発展モデルの可能性が提示されている。こうした「新農民」や「新農村エリート」に主導された幾つかのプロジェクト事例を参照しながら、単に「品質」の高い農産物を供給するだけでなく、農村文化の継承と持続的発展、古い村落の保護・維持、農村風景の豊富化、小農の意識向上、小農の社会関係づくりなどにかかわる幅広い活動に関わる金融資本・人的資本・社会関係資本等の融合を通して、都市と農村の関係性が再構築されていること、それが中国の農村発展パラダイムの転換可能性を示していることが論じられている。

終章では、以上の議論が総括され、この論文の学術的・社会的な貢献が明らかにされている。なお、現時点における中国AAFNsの限られた到達点と幾つかの脆弱性ゆえ、これを中国「三農問題」の具体的な解決方策、持続可能な農業・農村の発展に資する具体的な道筋としては評価しない議論もある。また、食料安全保障と農村経済成長を重視する立場から農業の近代化・工業化（中国語では現代化）をさらに推進しようとする中国政府がAAFNsに対して矛盾した政策を進めている状況や、巨大企業が農業ビジネスに参入し、農村部での大規模投資を進めている状況も確認されている。こうした状況下で、これまで非小農主体に牽引されてきたAAFNsが、小農主体の成長によって更なる発展と広がりを見せるかどうか問われているが、これらは今後の残された課題とされている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、欧米諸国で2000年頃より多くの学術的研究が蓄積されてきたオルタナティブ・アグリフード・ネットワーク (AAFNs) に関する議論と実践が、同様に広がりを見せる中国を事例に、それを農民問題・農業問題・農村問題を意味する「三農問題」という中国の具体的文脈に位置づけながら、その背景・動機と具体的な実践形態と「三農問題」解決への貢献可能性を、丹念に渉猟した文献調査や膨大な数のインタビュー調査を踏まえて包括的に明らかにした労作である。その意義は以下の諸点に整理できる。

第1に、欧米諸国の事例を踏まえて議論されてきたCSA (地域支援型農業) をはじめとするAAFNsの諸概念を中国の事例にそのまま適用するのではなく、中国の社会的・経済的・政治的な文脈を踏まえた「三農問題」の枠組みから中国のAAFNsを分析する視点を提示したことである。「三農」という枠組みの包括性ゆえ、本論文の分析も包括的で、中国AAFNsの現在の到達点と今後の可能性を多角的に論じること成功している。

第2に、19省、70のCSAをカバーする、190件の対面インタビュー、33件のオンライン・インタビュー、11件の電話インタビュー、計234件のインタビューを実施するなど、質・量ともに豊富な一次データに基づく独自の分析を行ったことである。

その結果、第3に、中国のAAFNsが欧米諸国や日本のように農民自身の主体性によって取り組まれたのではなく、むしろ「新農民」や「新農村エリート」と呼ばれる社会企業家的な都市住民や市民社会組織によって主導されているケースがほとんどであることを実証的に明らかにしたことである。逆に言えば、圧倒的多数を占める農村部の小農が主体的にAAFNsに取り組む上で制度的、技術的、資源的、文化的な諸制約があること、その一つに「三農問題」を踏まえて農村活性化を重点政策の一つに据える中国政府のAAFNsに対する政策上の矛盾があること——小農に不利な助成制度や透明性に欠けるガバナンスなど——も指摘されており、中国新小農 (小農的農村発展) に対する楽観的評価や中国政府の農村発展政策に対するナイーブな評価への戒めとして重要な問題提起となっている。

第4に、農村発展論や批判的食農研究の分野で共有されてきた鍵概念や理論枠組みを中国の状況に適用しながら独自に発展させようとする姿勢に貫かれている点である。例えば、経済諸主体間の関係性、とくに「品質」をめぐる合意形成と取引関係を概念的に整理する上で有効なコンパニオン理論や、小農的農業の多元的営為を通じた農村発展モデルを整理したvan der Ploegらの理論枠組みをさらに豊富化しようとした点は評価できる。

しかしながら、本論文にはいくつかの課題も残されている。第1に、主に「新農民」や「新農村エリート」が主導するAAFNsの実態とその潜在的可能性を明らかにすることに成功しているものの、中国農村部で圧倒的多数を形成する一般的な小農を (彼らの意識と行動を踏まえて) いかにAAFNsに巻き込み、農民・農業・農村をとりまく「三農問題」の実際的で具体的な解決方策をいかに展望するかにまで議論を深めることができなかつた点である。

そのことと関わって、第2に、中国「三農問題」の文脈でAAFNsを把握するために既存の小農的農村発展モデルを独自に豊富化させようとした点は評価できるし、その図式化の試みも評価できるが、やや概念先行的で、具体的・説得的な説明を欠いている点である。

第3に、CSA等のAAFNsが急速に拡大しており、中国「三農問題」の文脈で様々な潜在的可能性を持ちうるとしても、そもそも中国の農業市場や農村経済に占める位置づけが、統計的未整備もあって明示的に説明されないまま議論が進められている。AAFNsの到達点は（先進的な欧州諸国でも）きわめて限定的であるが、その潜在的可能性が経済的側面に限られるものではない点も含め、中国の農業及び農村経済における位置づけと評価視点について、冒頭で何らかの言及が必要だったのではないか。

第4に、もともと政策批判とシステム転換の含意（あるいは参加者の「環境意識や健康意識の高い生産者・消費者」から「行動する市民的な生産者・消費者」への成長可能性）を多分に有するAAFNsの理念と実践が、中国の今日的な政治状況（市民的政治的権利の抑制）の中で、どこまで／どのように発展しうるのかについては、多くの研究者の関心事となっている。中国国内ではセンシティブな問題ゆえ、それを明示的に議論するのは容易ではないかもしれないが、何らかの示唆があっても良かったのではないか。

とはいえ、以上に挙げた諸課題は、将来に向けた著者の研究の発展方向を示唆したものであって、本論文が現時点において達成した学術的意義ならびに社会的意義をいささかも損なうものではない。よって、本論文は、博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認める。なお、2019年7月30日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。